

田村俊子と戦時上海

―「中支で観た部分（警備、治安、文化）」を中心に―

荻原 桂子

岡山理科大学教育学部中等教育学科

（二〇二二年十一月一日受付、二〇二二年十二月九日受理）

一、はじめに

田村俊子は本名を佐藤とし、筆名に佐藤露英、佐藤俊子などがある。一八八四（明治一七）年、東京府東京市浅草区蔵前町（現在の東京都台東区蔵前）に生れ、東京府立第一高等女学校を卒業し、日本女子大学校国文科を中退している。代表作には『木乃伊の口紅』、『炮烙の刑』がある。官能的な退廃美の世界を描き、女性作家として人気を得た。

一九〇二（明治三五）年、幸田露伴の門下に入り露伴から与えられた露英の名で小説『露分衣』を発表するも、岡本綺堂らの文士劇に参加したことをきっかけに女優として舞台に出演したこともあるが、文学への意欲は失われず一九〇九（明治四二）年、事実婚の田村松魚に強要され、町田としこの名で書いた『あきらめ』が、一九一〇（明治四三年）年、大阪朝日新聞懸賞小説二等になり賞金一千円を得た。この作品は、翌年一月一日から三月二日まで同紙に掲載された。同年九月には、『生血』が『青鞥』創刊号に発表され、『中央公論』や『新潮』にも次々と小説を発表し人気作家となる。

一九一三（大正二）年一月、『遊女』（改題して『女作者』）を『新潮』に発表し、同年四月、『木乃伊の口紅』を『中央公論』に発表する。これより田村俊子の筆名を使用する。一九一四（大正三）年四月、『炮烙の刑』を『中央公論』に発表し、女性作家の第一人者として文壇に全盛を誇る。

一九一八（大正八）年、松魚と別れ、朝日新聞記者鈴木悦の後を追ひ、バンクーバーへ移住し、悦とともに現地の邦字紙『大陸日報』の編集に参画する。

一九三六（昭和一一）年、悦の死去により一八年ぶりに日本に帰国し、佐藤俊子名で小説家としての活動を再開したが、往時の筆力はなく佐多稲子の夫である窪川鶴次郎との情事が発覚する。その経験を書いた小説『山道』を発表後、一九三八（昭和一三）年一二月、日本を離れ上海に渡り中国語婦人雑誌『女声』を主宰することになる。

一九四五（昭和二〇）年四月一三日、友人の中国人作家陶晶孫の家から人力車で帰宅途中に昏倒し、搬送された上海の病院で同年四月一六日、脳溢血により客死した。享年六二歳であった。墓所は鎌倉の東慶寺にあり、死後に発生した印税により田村俊子賞が創設された。

中国語婦人雑誌『女声』は、大平出版印刷会社の編集室をかり、陸軍報道部の配慮で用紙を融通され発行された月刊誌である。俊子は中国服を身につけ、中国名の左俊芝として中国文化に根ざした、女性のための月刊誌を発行した。俊子の中国人および中国文化に対する愛情は『女声』という中国語婦人雑誌の隔々まで浸透している。日本人作家田村俊子と戦時上海の関係について、陸軍報道部の検閲によって掲載禁止になった可能性の高い「未発表原稿」「中支で私の観た部分（警備、治安、文化）」を中心に俊子の上海における文筆活動を考察する。

二、日本から中国へ

一九三〇（昭和五）年、林芙美子（一九〇三―一九五一）『放浪記』がベストセラーになり、一九三七（昭和一二）年、芙美子は毎日新聞特派員として上海、南京へ赴き南京光華門に立ち「女流の一番乗り」ともて

はやされた。さらに、翌年九月には、内閣情報部によるペン部隊の一員として上海に発ち、一〇月漢口陥落に一番乗りを果たすというスタンド・ブレイが話題となり、帰国後は全国で報告公演をしていた。

日中戦争の同時期、親子ほど歳の離れた老年期にさしかかった五五歳の俊子の戦時上海における活躍には、芙美子の目立った活躍とは全く質の違う目を見張るものがある。一九三一（昭和六）年九月に満洲事変が勃発し、翌年一月の第一次上海事変、同年三月の満洲国建国による日本の中国大陸進出が始まる。日本は一九三四（昭和九）年一月ワシントン海軍軍縮条約を破棄し、一九三七（昭和一二）年七月七日、盧溝橋事件によって日中戦争に本格的に突入する。同年八月、上海を制圧（第二次上海事変）し、翌月には占領するという激動の戦時上海にあつて、俊子は中国人とともに生活するなかで、地に足のついた、形式的でない血の通った国際文化交流を目指していたのである。ここには、若き頃、鈴木悦とともに、カナダやアメリカで培った真の社会活動家としての本領が発揮されている。

一九三八（昭和一三）年一二月、中央公論社の特派員として日本から航路ではなく飛行機で中国に飛び立った俊子は、上海から南京に移動し、南京で五六歳の新年を迎える。一九三九（昭和一四）一月、揚州、蘇州、鎮江、杭州と精力的に取材し上海に戻る。月末には北京に発つが、途中青島、天津などに立ち寄る。北京では六国飯店や韓記飯店などに滞在し、武田泰淳、奥野信太郎、丸岡秀子などと交流する。一九四〇（昭和一五）年、北京飯店に移るがホテル滞在費が嵩むことから翌年には平等俊成家に寄寓する。一九四二（昭和一七）年二月、北京から南京に移動して、日本大使館囑託となり、草野心平（一九〇三―一九八八）の斡旋で軍部の援助も受け同年五月、上海で中国語婦人雑誌『女声』を創刊することになる。

戦時上海には日本人が一〇万人居留し、邦字紙『大陸新報』（一九三九年一月一日―一九四五年九月一〇日）が刊行されていた。『大陸新報』とは、対日協力政権であった中華民国維新政府下の上海で大陸新報社から刊行された日刊新聞で、一九四〇三月末に成立した汪精衛政権下で発行が継続され、終戦後まで続いた。当時の日中両国文化交流の状況を考えるとき華中を中心とした日本軍占領下の中国の政治、経済、戦況、時事、さらには文学・文化・芸術の動向、社会事情などを知る上で二次資料として重要である。

一九四三年二月に『上海毎日新聞』も併合され、『大陸新報』は「中支唯一の国策新聞」となった。同紙には張愛玲「香港―焼け跡の街」（室伏

クララ訳）が連載されている。中国人女性作家張愛玲（一九二〇―一九九五）が上海の日本人間で相当数の愛読者を得ていたことがわかる。

阿部知二が「花影」（『文学界』一九四九年六月）という戦時上海の交友を追想した作品に「年老いた日本の女流作家」「もう十年も前から北京上海にすまつてゐる孤独な人」と描いたのは『あきらめ』『木乃伊の口紅』などで知られた田村俊子すなわち佐藤俊子であった。俊子は一九四四年、南京での第三回大東亜文学者会に阿部と共に上海から参加した。

三、一九三九（昭和一四）年―一九四四（昭和一九）年の文筆活動

俊子は、中央公論社の特派員として一九三八年一二月に上海に赴き、当初の予定は一、二ヶ月の滞在であった。日本文壇を窮屈に感じていた俊子は、そのままずるずると北京での生活が続けることになる。カナダから帰国後の俊子の心情には、劉建輝が指摘する『日本脱出』を夢見る多くの日本人にとって、この混沌とした都市は、まさにもっとも近い『避難所』であり、もっとも近い『楽園』だったのである。²という上海に移住する当時の日本人に近似するものがあつたと考える。俊子の新天地上海での文筆活動が活発となつたちようどその頃、南京国民政府の顧問だつた草野心平は、中国人女性のために文化的雑誌の刊行を考えていた。一九三九（昭和一四）年二月一日『婦人公論』に佐藤俊子で発表した「上海に於ける志那の働く婦人」では、「自分たち支那の女性には日本の女性を尊敬してゐる。日本の女性には力がある。支那の女性には熱はあるけれども力がない。」と述べている。同年三月一日「知識層の婦人に望む 日支婦人の眞の親和」「婦人公論」を発表、「一人の日本婦人を斯様な純真な喜びで迎へた彼女たちの其の心の底に潜む唯一の願ひの中には、彼女たちの閉塞された生活の扉が日本の知識階級の婦人たちによつて開かれたい切なる願ひがあるのである。」⁴と述べ、上海の働く女性の現状を報告している。

同年三月四日―五日「支那の子供」(二)(三)『東京朝日新聞』を発表し、南京の小学校で視察した子どもたちの姿が生き生きと報告されている⁵。

同年四月一日「國民再組織と婦人の問題」「婦人公論」で「日本の婦人の従順さは、世界に冠たる美德とされてゐる。日本が戦争に強いのも、婦人のこの美德が戦争を内部から支へてゐるからであるとも現地で聞いた。私も其の點大いに世界に誇る一人であるが、然し、若しこの美德が國民的資格ある婦人の美德として示されたならば、自覚ある日本婦人として百倍の価値を増大したであらう。」と述べ、日本の婦人が資格を持たないことに無自覚なことを嘆いている。俊子は『婦人公論』特派員と

して中国から内地日本婦人への意識高揚を訴えているのである。

同年四月八日、九日、一日、二日、三日、四日「俳優学校と程硯秋」(一)(二)(三)(四)で「北京通信」として支那の俳優学校の様子を報告している。⁷⁾

俊子は、若い頃、日本で女優として舞台に立ったこともあり、支那文化の中でも演劇に関して関心が深かった。女形として名高い梅蘭芳に次ぐ名優で、現在支那の演劇界で人気随一の程硯秋を訪問した印象が述べられている。こうした演劇評論は、『女声』においても展開される。

同年五月一日「婦人の大陸進出とその進歩性」『婦人公論』では、「支那大陸に夥しい数の日本婦人が進出している。」と述べ「凡そ軍隊のあるところ、日本人が既に一步踏み入ったところで働く婦人がそれに従属してゐないところはない。」と報告している。

同年六月一日「雪の京包線」『改造』では、『婦人公論』等の雑誌や新聞への記事文とは違った紀行文が掲載されている。「蒙疆はまだ危険だと云はれた。いつ何所で匪賊に襲はれるか分からないと脅かされた。」と北京に来てから三週間後の三月ということで、知らない土地に一人旅する淋しさを雪の風景の中で描いている。特派員として記事文を書く俊子と小説家として紀行文を認める俊子の対照が文章に溢れている。

同年同日「婦人の歩む民族共和の道」『婦人公論』では、「支那の婦人が女権擴張の思想を呼び醒まされた革命初期の年代を振り返ると、日本では青鞥社によって新婦人運動の萌芽が漸く芽生えた時代に少し先んじてゐる。」¹⁰⁾と述べ、日本のフェミニズム運動と中国の女性進出の現状を比較している。

同年八月一日「新しき母性教育とは？」『婦人公論』で「新しい母性教育とは、云ひ代へるならば女子教育の一般的向上において、知性を豊かにしめる新教育を指すに外ならず、この趣旨を否定する限り、新しい母性教育はたゞ空言にとどまるであらう。」¹¹⁾と主張している。

同年八月一〇日「北京と北京人を語る座談會」『文藝春秋』で、作家佐藤俊子として華北交通会社久米正雄たちと座談している。¹²⁾ 紅一点の俊子は中国人の「面子」についてエピソードを交えて語っている。

同年九月一日「日本の婦人を嗤ふ支那の婦人」『婦人公論』で、中国の知識階級に属する婦人が、日本の婦人は夫と平等でない指摘していることを報告している。¹³⁾

日中文化交流において、ジェンダー表象を母語である日本語ではなく中国語で発信しようとした俊子の目論見は、まず、中国人女性の現状を在中特派員として国内の日本人女性に訴えることから始まったのである。

四・佐藤俊子「中支で観た部分（警備、治安、文化）」について

俊子が北京、上海、南京といった中支に滞在していた時期は、ちょうど日本が中国大陸に進出し、満州事変や上海事変を起こしていた戦時である。一九三〇年代は、日本は日清・日露戦争で獲得した朝鮮半島や租借している関東州などを足がかりとして、中国大陸進出を画策していた時期である。俊子は、まさに渦中の戦時上海に単身乗り込むのである。最初は、中央公論社特派員という肩書きで二、三ヶ月のつもりだが、戦況が厳しくなるにもかかわらず、現地での言語活動にのめり込んでいく。平時でも俊子にとって母語でない中国語で雑誌を主宰するのは至難のわざである。ましてや、治安の悪い戦時上海で日中文化交流を実践することの意味について考察するまに、当時の日中関係について概観する。

日露戦争後、満州や内モンゴルに進出し植民地にすることを狙っていた日本は、関東州を管轄していた関東軍によって日本の南満州鉄道の線路で、満州を支配して軍閥張作霖を列車ごと爆破して満洲を一気に占領し（満州事変）、満州国という実質的に日本の傀儡国を立てる。辛亥革命の後にできた中華民国は日本の動きを認めず、権利を回復することを主張していたが、中華民国は国内が混乱していたため日本の動きを止めることができなかった。

当時中国では蒋介石率いる国民党と毛沢東率いる中国共産党の二党が戦争を繰り返していた（国共内戦）。一九三六年蒋介石は張学良に西安で監禁される（西安事件）、父張作霖を関東軍に爆殺されていたので日本を敵視していた張学良は、国共内戦をやめて国民党と共産党が手を組む国共合作という抗日民族統一戦線を組織した。

抗日民族統一戦線が組織されて以降日本と中国の関係は急激に悪化し、日中戦争の引き金となる事件が一九三七年の盧溝橋事件であった。この事件をきっかけに日本と中国は本格的な戦争状態に突入した。

日本軍はまず中国の北部である北京などを制圧し、南下を始め、上海に駐留していた日本軍も当時の首都であった南京に向かって進軍を開始。一九三七年一月には南京周辺の地域を完全に手中に収め南京に迫る。蒋介石はソ連やドイツの支援が全くなく南京から成都に逃亡する。同年一二月に南京を占領した日本軍は日中戦争で手に入れた占領地域に南京政府という政府を作り上げ、当時国民党の汪兆銘をリーダーとした。

その後、日本軍の総攻撃は続き、南京の臨時首都であった漢口も陥落、ついに蒋介石のいる成都にまで攻め入ろうと成都に近かった重慶に対して無差別爆撃を開始する。

日本有利に進んでいた日中戦争だったが、一九三七年も後半になると

戦線が膠着して泥沼化する一方、中国はイギリスやフランスなどの国々から武器などの支援を受けて強化される。

一九三二年の第一次上海事変と一九三七年の第二次上海事変による日中全面戦争の渦中で、日本の女性作家田村俊子は中央公論社特派員として戦地上海で内地の日本人女性と外地の中国人女性の生活に根ざした職業意識や職業環境、さらには女性全体の地位向上のための政策にいたる、机上空論ではなく現実的な解決に向けて行動を起こしていたのである。

一九三九（昭和一四）年二月一日と推測される¹⁴未発表原稿「中支で私の観た部分（警備、治安、文化）」は、まさにこの時期の俊子の肉薄した文章である。一九三九年二月一日といえ、まさに上海では反日感情が沸き上がっていたときである。陸軍省から「従軍許可証」を与えられたとき俊子は「私の支那に旅する目的は唯、現地における（殊に中支那方面の）占領区域内の治安工作、又は文化工作云はれる面について、其れを詳さに知り、そして観たいと云ふ上にあつたのであるし、又単に前線風景を見る為の前線めぐりは、寧ろ死の中に活動する軍隊の妨げとなるのみであり、自身に取つても無意味である」と考へ、又無論従軍許可を願ひ出ても、其れは聴許されるものではないと思つたからであつた。¹⁵と説明している。続けて、陸軍省に出頭した際にも「戦線へ行くのが目的ではなく、後備区域の治安、文化の建設又は工作を見るのが目的」¹⁶であるとはっきり言い切る俊子に対して少佐は、「あなたはもつと強いもの、力あるものを現地から求めて来て欲しいと望まれた。」¹⁷と述べている。「従軍許可証」は俊子のハンドバックの底におさめられたが、俊子の胸中には少佐のことばにあつた「力あるもの」を心に刻んだ。

林芙美子や他の女性作家が従軍作家に名を連ね戦地取材を行い、雑誌などに記事を掲載していたものとは内容や頻度に大きな差が認められる。表層的な評価を狙つたおどろきの記事ではなく、日中女性の内面からの啓蒙活動を的確な論調で展開している。俊子の女性啓蒙活動には、一九一八年に朝日新聞記者鈴木悦の後を追ひ、松魚と別れバンクーバーへ移住、悦とともに現地の邦字紙『大陸日報』の編集に参画した経験が活かされている。

俊子の「力あるもの」とは、上海事変のあとに残された傷跡の声を聴くことであつた。事変ののちの「民心の安定への一步」¹⁸を証左することであつた。治安工作としての救済事業の一つである「施療病院」で働く医師の話として「支那民衆のこゝろを掴むと云ふことも、其れ以上の高い精神、其れ以上の大きな心で接触するほかに、完全に掴むことは困難だと云ふことを暗示してゐる。」¹⁹と述べている。治安とは、政治

工作および経済工作を基礎的工作としつつも、俊子の中支の文化工作の重きはあつた。新文化の建設は「非常な困難と覚悟とが―其れは全く最前線において戦ふ将兵以上の頭腦的奮戦と決死の覚悟を期さなければ、支那地上における日本文化の建設の任務は尽くされないことが考えられる。」²⁰と時局に合わせた控え目な表現で綴られている。俊子は、筋金入り社会活動家としての視点を十分に発揮しているが、俊子は、上海事変後のうなぎ登りの日本人の上海進出を横目に「日本の中支における資本の進出」²¹にまで言及することは避けている。

五 おわりに

俊子が中国に滞在した期間の日中国際交流は、大東亜文学者大会とのつながりからも推しはかることができる。ここに、俊子主宰中国語婦人雑誌『女声』の言語空間が占める複雑な背景が浮かび上がってくる。大東亜文学者大会に郭沫若、老舍、林語堂といった大物作家の参加が実現できなかったことが、戦時下の日中関係の難しさを語っている。『女声』には共産党地下工作員である関露をはじめとして、丁景唐が率いた上海地下工作員や進歩青年もあり、周作人や柳雨生といった中国人作家の寄稿もあつたことから、『女声』には不思議な吸引力が働いていたことがわかる。

一九四二（昭和一七）年一月、東京で「第一回大東亜文学者会議」が開催されることになり、草野心平は中華民国を代表して来日した。「大東亜文学者会議」では、東洋の民族が一致団結して大東亜戦争を勝ち抜くための大東亜精神の樹立およびその強化普及が大会の目的であつた。理想を高く掲げたこの大会は表向き大成功であつた。第二回大会は一九四三年八月東京で、第三回大会は一九四四年一月南京で開催された。第四回は南京に内定していたが、日本の敗戦が報じられると心平は家族とともに南京日僑集中營に収容された。

上海での邦字紙『大陸新報』文芸欄に掲載された張愛玲の言語行為、日本語翻訳を担つた室伏クラという女性の言語行為および俊子主宰の中国語婦人雑誌『女声』文芸欄に寄せられたさまざまな日本人作家および中国人作家の言語行為、中国語翻訳を担つた陳緑妮の言語行為などは、戦時下の上海という特殊な場所と時代背景に彩られて彩りある女性表象を生み出した。

中国語翻訳の宮沢賢治「注文の多い料理店」、豊島与志雄「銀の笛と金の毛皮」「うんとと石」「太一の靴は世界」「象のワンヤン」、武者小路実篤「愛と死」、火野葦平「怪談宋公館」など、日本語が中国語に翻訳される文

化的フィルターは重要である。

『田村俊子』を上梓した瀬戸内寂聴（一九二二～二〇二一）は、俊子と関わりのあった中国文化協会の武田泰淳や堀田善衛をはじめ、上海に渡っていた阿部知二や石上玄一郎などを作品に登場させている。なかでも武田泰淳は雑誌で中国語翻訳をおもに担っていた陳緑妮をモデルとした人物を自分の作品に登場させるなど日本人作家の作品が中国語雑誌『女声』をめぐる複雑に関係していたことがわかる。戦時上海で困難な言語行為を繰り返した中国語婦人雑誌『女声』の存在は、日中戦争から九〇年近く経た現在において重要性を高めている。

未発表原稿である「中支で私の観た部分（警備、治安、文化）」は、当時としては触れてはいけない日中の関係性に深く切り込んだ、一人の日本人女性によって書き残された現代の日中関係を考える上でも重要な言語行為となっている。

注

- ¹ 黒澤亜里子「解題」黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 七九七頁
- ² 劉建輝『増補魔都上海 日本知識人の「近代」体験』ちくま学芸文庫(2010) 一五一頁
- ³ 黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 五三五頁
- ⁴ 黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 五四〇頁
- ⁵ 黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 五四二～五四七頁
- ⁶ 黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 五五三頁
- ⁷ 黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 五五四～五六二頁
- ⁸ 黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 五六三頁
- ⁹ 黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 五六七頁
- ¹⁰ 黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 五八四頁
- ¹¹ 黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 五九一頁
- ¹² 黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 五九二～六一一頁
- ¹³ 黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 六一二～六一四頁
- ¹⁴ 黒澤亜里子は「解題」で「い」の原稿は、中央公論社の出版部長だった藤田圭雄氏の寄贈による(神奈川近代文学館蔵)。詳しいいきさつは分からないが、原稿の末尾に(北京・二、一二)という記述があり、内容、年譜的な背景などからこの時期のものと推定した。」と述べている。黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 七九七頁
- ¹⁵ 翻刻仲宗根あゆみ(未発表原稿)「中支で私の観た部分(警備、治安、文化)(一)」黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 七〇九頁

- ¹⁶ 翻刻仲宗根あゆみ(未発表原稿)「中支で私の観た部分(警備、治安、文化)(一)」黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 同頁
- ¹⁷ 翻刻仲宗根あゆみ(未発表原稿)「中支で私の観た部分(警備、治安、文化)(一)」黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 七〇九・七一〇頁
- ¹⁸ 翻刻仲宗根あゆみ(未発表原稿)「中支で私の観た部分(警備、治安、文化)(四)」黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 七二四頁
- ¹⁹ 翻刻仲宗根あゆみ(未発表原稿)「中支で私の観た部分(警備、治安、文化)(六)」黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 七二〇頁
- ²⁰ 翻刻仲宗根あゆみ(未発表原稿)「中支で私の観た部分(警備、治安、文化)(七)」黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 七一九頁
- ²¹ 翻刻仲宗根あゆみ(未発表原稿)「中支で私の観た部分(警備、治安、文化)(七)」黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第9巻 ゆまに書房(2017) 七二二頁

参考文献

- (1) 瀬戸内寂聴・小田切秀雄・草野心平監修『田村俊子作品集』第1巻～第3巻 オリジン出版センター(1987)
- (2) 丸山昇『上海物語』集英社(1987)、『上海物語』講談社学術文庫所収(2004)
- (3) 劉建輝『魔都上海 日本知識人の「近代」体験』講談社(2000)、『増補 魔都上海 日本知識人の「近代」体験』(2010)
- (4) 高橋博文編『戦時上海 1937～45年』研文出版(2005)
- (5) 黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第1巻～第9巻 ゆまに書房(2017)

Toshiko Tamura and wartime Shanghai

—Focusing on "the part seen in Central China (guard, security, culture)"—

Keiko OGIHARA

*Department of Secondary Education, Faculty of Education,
Okayama University of Science
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan*

(Received November 1, 2021; accepted December 9, 2021)

In December 1938, Toshiko, who flew from Japan to China as a correspondent for Chuokoron-she moved from Shanghai to Nanjing and moved from 1939 (Showa 14) to 1940 (Showa 15) will be spent in Beijing. In February 1942, she moved from Beijing to Nanjing, and in May of the same year, with the help of Shinpei Kusano, she launched the Chinese women's magazine "Women's Voice" in Shanghai. Fumiko Hayashi and other female writers interviewed the battlefield with the names of the military writers, and there is a big difference in the content and frequency from the articles published in magazines. Rather than a rough article aimed at performance evaluation, From the inside of Japanese and Chinese women, she did activities with her feet on the ground.